

	実態と課題	授業改善策
国語	<ul style="list-style-type: none"> 令和7年度、RSTの結果では、6分野平均の自校の能力平均が-0.16で、能力値全国平均-3.0と比較すると、微量であるが上回っている。4.5割の児童が6分野平均でB評価以上ではあるものの、5.5割の児童がC評価以下となり、理解についての定着が二極化となる実態が分かり、今ひとつ十分ではないと言える。 令和7年度、全国学力・学習状況調査の結果では、自校の平均正答率70%に対し、全国平均66.8%と比較すると、微量であるが上回っている。正答率が低かった問題として、資料を読み返して、資料2・3・4から理由を取り上げて、文章にまとめる問題が5割弱の正答率であった。 漢字の定着、活用する力が、身に付いている児童と身に付いていない児童の差が大きい。 記述式の問題や作文等において、条件を満たした記述や、自分の考えを整理して記述することが難しい児童がいる。 	<ul style="list-style-type: none"> 負の値が比較的高かった照応解決（代名詞などが指す内容を認識する力）と、同義文判定（2つの文の意味が同一かどうかを判定する力）の理解力向上のため、朝学習の時間を使ったNIEの取り組みを増やす。様々な新聞記事を読み、指示代名詞に着目したり、短い時間で幾つかの問題に取り組んだりすることで、その記事が何を伝えているのかを読み取る力を身に付けさせる。また、日頃の学習において、指示代名詞を取り扱い、その都度丁寧に確認しながら学習に取り組んでいく。 目的に応じて、文章と図表などを結び付けるなどして必要な情報を見付けることができるかどうかをみる学習を取り上げたり、理由を書かせたりする活動を設けたりして、学習に取り組んでいく。 自分に合った漢字学習の方法（プリント・ドリル・教科書読み等）を提示し、自分で選んで定着を図る。また、学習の中で既習の漢字を使うように声を掛けることで習慣化させる。 様々な文種の文章に触れ、それぞれの文種で文章を書く経験を重ねることで、条件に合った文章表現を意識付けさせる。自分の考えを書くことが苦手な児童には、タブレットPCで文章をまとめることも自分で選ばせる。
社会	<ul style="list-style-type: none"> 都道府県の位置、国土の特色といった基本的な知識を身に付けることができている児童と身に付けていない児童の差が大きい。 資料の読み取りにおいて、2つの資料を比較してその特徴を捉えたり多角的に考えたりすることが苦手な児童が多い。 現在の政治の仕組みや社会のあり方などに興味や関心が薄い児童が多い。 歴史的事象の時間的な関連の把握に課題がある。また、各単元の内容において調べたことをまとめ、社会の変化や物事の関係性を表現することが得意な児童と苦手な児童の差がある。 	<ul style="list-style-type: none"> 既習内容を押さえるために、地図帳を活用したり、電子機器や掛け図を使って互いに問題を考え出し合ったりする方法を伝え、自分に合った方法で、基本的な知識を身に付けることができるようにする。 資料を読み取る観点を明確にし、始めはワークシートなどを用いて2つの資料を観点ごとに比較できるよう指導する。 メディア等を活用して社会の現状や身近な話題に目を向けさせ、自ら課題を見つけて解決していけるような学習の場を設定し、学びを自己調整できるようにする。 各時代の関連をノートやクロームブックにまとめる活動を設定し、レイアウトの仕方や社会・時代の変化や特徴のポイントを分かりやすくまとめる方法を自己決定できるように参考資料を提示し、取り組めるようにする。
算数	<ul style="list-style-type: none"> 令和7年度、全国学力・学習状況調査の結果では、自校の平均正答率69%に対し、全国平均58.0%と比較すると、11%も上回っている。正答率が低かった問題として、都道府県Aのブロックリーの出荷量が増えたかどうかを調べるために、適切なグラフを選び、出荷量の増減を判断し、そのわけを書く記述式の問題が34.1%の正答率であった。 また、$3/4 + 2/3$について、共通する単位分数と、$3/4$と$2/3$が、共通する単位分数の幾つ分になるかを書く問題の正答率が36.4%で低かった。 6年生の学習では、算数の知識・技能を概ね身に付けている。「データの活用」は、他の単元よりも定着度が高い。思考力・判断力・表現力については、知識・技能よりも習熟度が低い。特に「円の面積」「角柱と円柱の体積」の学習で課題が見られる。 	<ul style="list-style-type: none"> 算数に限らず、他教科でもグラフを提示する場面では、目的に応じて適切なグラフを選択できるようにする。また、グラフを選択した理由を言葉や数を用いて記述させる時間を設けていき、一人で考えたり、友達と協力したりして、自己調整しながら、問題に取り組ませていく。 分数の加法について、共通する単位分数を見だし、加数と被加数が、共通する単位分数の幾つ分かを数や言葉を用いて記述できるかどうかを図・式・言葉に関連付けながら、解法を筋道立てて説明する活動を行う。 日頃の少人数指導を行う中で、個々の課題を把握して、その児童に合った学習内容に応じた指導を行っていく。また、苦手意識のある児童に合った学習内容とペースに合わせ、苦手意識を減らせるよう個別に指導を行う。 教科書の問題文から「分かっていること」「分からないこと」を読み取り、整理する活動を設定する。また、児童が問題づくりの学習に取り組む際、自己決定ができるよう、既習事項を確認する活動を取り入れ、意欲的に学習に取り組めるようにする。 学習において、答える際に式や答えだけでなく、なぜそのように考えたのかを言語的に説明させる発問を取り入れ、学びを深めていく。

理科	<ul style="list-style-type: none"> 令和7年度、全国学力・学習状況調査の結果では、自校の平均正答率 63%に対し、全国平均 57.1%と比較すると、6%上回っている。正答率が低かった問題として、アルミニウム、鉄、銅について、電気を通すか、磁石に引き付けられるか、それぞれの性質に当てはまるものを選ぶ問題が、13.6%と低かった。また、レタスの種子の発芽の結果から、てるみさんの気付きを基に、見いだした問題について書く記述式の問題が、29.5%と低かった。 問題解決の中で、自然事象から問題を見いだすことに苦手意識をもっている児童が多い。また仮説を考えると、自分の経験や既習事項をもとにしながら、検証可能な仮説を考えることが難しい児童がいる。 実験計画を立てる際に条件制御を意識することはできるようになっているが、実験方法などを適切に理解して実験に取り組むことが難しい児童が多い。 	<ul style="list-style-type: none"> 身の回りの金属について、電気を通す物、磁石に引き付けられる物があることの知識が身に付いているかどうかを「エネルギー」を柱とする領域の単元で振り返りながら、身近な生活と結びつける活動を取り入れていく。また、レタスの種子の発芽の条件について、差異点や共通点を基に、新たな問題を見だし、表現できるように、授業で学んだインゲン豆以外の植物にも触れる機会を設けたり、日々の学習の導入での問題作りを丁寧に行ったりして、自分や友達の疑問から問題を作り出す力を養っていく。 事象提示の工夫や文型の提示などを通して、一人一人が問題を見いだせるよう、問題提示から学びを自己調整していく活動を設ける。また仮説を考える際に自分の経験を想起させ、話し合い等で検証可能性を考えられるように声掛けを行っていく。 実験計画を自分に合った方法で考えさせる回数を増やし、本当にその方法で実験ができるかの検証と、実験前に結果の見通しを明確に書かせ、主体的に実験に取り組めるようにする。 問題解決を通して理解するだけでなく、学びを自己調整しながら、主体的に問題を解決できたと達成感や有用感を感じられるような指導・声掛けを行っていく。
音楽	<ul style="list-style-type: none"> 頭声的発声で、声の響きを意識して意欲的に歌う児童が増えたが、自分の歌声に自信をもてない児童もいる。体全体でリズムを感じ取りながら、伸びやかな声で歌う児童が増えた。また、明瞭で聴き取りやすい発音を目指して、二部合唱に取り組んだが、発音が不明瞭で、明瞭な発音を意識して歌うことができない児童もいる。 器楽の学習にも意欲的に取り組んでいるが、ソプラノリコーダーでは、タンギングの技術がまだ身に付いていない児童がいる。緑小音楽隊では、担当楽器の練習に励み、学年全体で心を合わせて演奏することができた。 	<ul style="list-style-type: none"> 自分の歌声に自信をもてない児童の理由は様々あるが、男子の変声期の児童については、1オクターヴ音程を下げた歌ったり、無理のない範囲で声を出すようにしたりするなどして、一人ひとり児童の状況に応じて指導していく。 リコーダーの学習では、自分の音や友だちの音をよく聴きながら演奏できるように、指導方法や場の設定の工夫をする。
図工	<ul style="list-style-type: none"> 落ち着いて授業を受ける態度の児童が多く、協力して準備や片付けを行う態度が育っている。 自信がなく、製作し始める段階で、不安がる児童も少なくない。 製作の過程で、試行錯誤しながら、深めていこうとする姿勢があまり見受けられない。 	<ul style="list-style-type: none"> 児童が手応えや新鮮な喜びを感じられるような材料や場所、空間などとの出会いを設定し、つくる楽しさ、喜びを感じられるようにする。 一人ひとりの製作のよさを見取り、具体的に褒めたり、全体の前で紹介したりする機会を頻繁にもち、個々の自己肯定感が高まるようにする。 活動を通して、自分にとって、どのような意味や価値が作り出されたのかを意識して振り返らせるため、作品カードを書いたり、見合っって認め合ったりする機会を計画的にもつ。
体育	<ul style="list-style-type: none"> 運動をよくする児童とそうでない児童の差が広がっており、体力や運動能力の二極化が進んでいる。また、休み時間は室内で過ごす児童が多い。 児童が運動のポイントを把握できるよう、運動のポイントを掲示物や学習カードで示しているが、技能面の習得で苦労している児童が多い。 一人一台端末を活用して自分の動きを振り返ったり、協働的に学習に取り組んだりする機会を増やしているが、それに費やす時間が多くなり、実践する場面が少なくなる。 よりよいゲームのための提案をしたり、ゲームで生かせる簡単な作戦を選んだりすることができる児童が増えつつある。 場や用具の準備を素早く終わらせることができる。また、ルールを守って取り組み、運動を楽しみながら親しんでいる児童が多い。 	<ul style="list-style-type: none"> 休み時間に使える遊び道具を充実させ、自分に合った道具を選び、すすんで運動に取り組もうとする意欲を高める。 掲示物や学習カードのポイントをシンプルにし、一人当たりの運動量を増やしていくことを意識しながら、技の習得の時間を多く設ける。 一人一台端末を活用する時間を最小限に留め、繰り返し実践しながら自分の動きを振り返れるように、協働的な学習を工夫して取り組ませる。 さらに楽しめるルールはないか自分たちに合ったものを考えさせ、そこから選んだ方法で活動に取り組めるようにする。 児童のよい動き、よい発言、よい考えを褒めるようにしていく。また、振り返りの時間などで共有することで、クラス全体に広める。